
鬼の女～血の娘～

獅兎羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼の女～血の娘～

【ISBN】

978072

【作者名】

獅鬼羅

【あらすじ】

鬼兵隊の鬼の女 芦咲 露呑は真選組の隊士殺しを高杉から頼ま

れる。そこで懐かしい人たちに会う。

「お前らは恨まないのか・・・。この世界を恨まないのか。」

別れ際に言つた女性の一言に懐かしい人たちは昔の人の面影を感じ・

・・・・。

第一訓 捉みどころがない男

貴方に会えてよかったです。

私がそう思ったのはいつのことだら一か・・・。

「ねえ晋助。貴方はなにを考えているの?」

赤色の模様が入った着物を着た女性が言った。

しかし、その模様は血だった。

それも、全て自分の血ではない他の人からの返り血。

「さあーな、俺にもそれはわからねーことだ。」

冷たい声で高杉は言った。

「貴方は本当に掴みどころのない男ですね。」

女性は笑顔で言った。

「それはオメーもだろ、あらの霞呑。」

高杉が言った。

「私はおんなよ。」

笑顔で言った。

その笑顔を見る高杉。

「そ、うだ、露呑。ひとつ頼んでいいか?」「なんでもどうぞ。」

露呑は笑顔で言った。

「真選組の隊士何人かを殺してくれないか?」

高杉が言った。

「私、一人ですか?」

露呑が聞く。

「オメーなら簡単だろ?」

冷たい声で言った。

「ええ。分かりました。」

露呑はそう言つと船から降りて行つた。

「露呑・・・いや、春櫻お前は先生を奪つたこの世界を恨まないのか?」

高杉が言った。

かなしさを含んだ声で。

第一訓 捜みどりが男（後書き）

露呑の本名は芦咲 露呑です。

春榎の正体はこれから分かりますよ。

感想お願いします

第一訓 隊士殺し（前書き）

残酷表現あります。

苦手な方はお控えください。

第一訓 隊士殺し

「邪魔するぜ。」

真選組の屯所にはなぜか銀時と神楽、新八が居た。

「で、依頼つづーのはなんだ?」

銀時が言った。

「それはな・・・『ドーン』・・・なんだ?」

土方の声を大きな音が遮った。

「副長、大変です。攘夷浪士が攻めてきました。」

「なに!?」

土方が声を上げた。

土方は刀をとり、外へ走り出した。

その後を万事屋組が追いかけた。

「あらら、真選組ともあろうに弱いのですね。」

土方たちが外へ出るとそこには一人の女性が居た。女性の着物は血に染まり、頬にも返り血が付いている。その女性の前には倒れている真選組の隊士が居た。そして、近くには山崎が刀を構えている。

「山崎!...」

土方が叫んだときにはもう遅く、女性は刀を振り下ろした。

ドーン。

「ぐつ・・・。」

「だ、旦那・・・。」

女性の刀は銀時が止めていた。

「あら、なかなかやるのね。白夜叉。」

女性が言った。

「お前なぜそれを？そのことを知つてんのは数すくねーぞ。」

銀時が驚いて行つた。

「晋助から聞きました。」

女性が言った。

「お前・・・何もんだ？」

土方が言った。

「私は芦咲 露呑の申します。鬼兵隊の總統補佐ですわ。」

露呑が言った。

「總統補佐だと・・・？」

土方が言った。

「はい。晋助に一番近い幹部ですわ。」

そのことに驚きを隠せない土方。

「今回晋助からの真選組の隊士殺しをしろと言われたので参上いたしました。」

「隊士殺しだと！？」

土方が声を上げた。

露呑は笑うだけだった。

「お前俺と会つたことがあるか？」

銀時が言った。

「私は知りませんが、晋助は俺のなじみだと。」

露呑が言った。

「では、私はお暇をさせてもらいますわ。」

露呑はそう言い、去つて行つた。

私は嘘をついている・・・。

銀時。

貴方に会えて嬉しいのに・・・。

嬉しくてたまらないのに。

私の・・・初恋の人。

第一訓 隊士殺し（後書き）

どうでしたか？

感想をお願いします。

第三訓 初恋の相手（前書き）

この話で・・・銀時がぶつ壊れます。
銀時ファンの方、見ない方がいいです。
ショックを受けます・・・。

第二訓 初恋の相手

「お前、もう何で泣くの……。」

銀時はやつ叫び、露呑のあとを追つた。

露呑は塀に向いて肩を震わせていた。

「露呑だっけ？」

不意に声をかけられて、露呑が振り返る。
その目は赤かつた。

「あら、来たのですか？ 白夜叉。」

露呑が言った。

「オメー！」 何やつてる、こんなとこで泣いてよ。」

銀時が言った。

「泣いてなどこませんわよ。」

露呑が言った。

「強がりは昔から変わらねえーな。」

銀時が言った。

その声に露呑は肩を落とした。

「はあー、気づいたの？」

「当たり前だろ？」

そんな一人の様子を電柱の影から土方、沖田、神楽、新八が見ている。

「あの二人知り合いぽいね。」

「そうですねイ。」

「あんな美しい顔して人を斬るなんてな。」

4人はそんな会話をしている。

「お前、髪切つたんだな。」

「晋助が短いほうが似合つて。」

露呑は笑顔で言った。

「なあ、春櫻。」

「その名前で呼んでくれるんだ。」

さつきよつさりに笑顔で言った。

「なんで總統補佐なんかに？」

銀時が聞いた。

「不思議じゃないでしょ？ 戦時中だつて鬼兵隊の副官だつたから。」「さうだけどよ・・・。」

銀時が少しか小さな声で言った。

「もしかして心配なの？」

露呑がからかいつぶやいた。

「んなことない……」

銀時が言った。

それを見てクスクス笑う。

「ジラは元氣にしてる?」

「ああ。」

銀時が言った。

「やうなんだ。また会いたいな。」

露呑が懐かしそうに言った。

「さつと会えるやー。」

あつやつづ銀時。

「やうね。指名手配なのにあちこちに面をうだもん。」

露呑が言った。

「高杉も変わらないだろ。」

聞きなれた声がした。

「ジラー?」

銀時が驚いた声を出す。
沖田と土方が身構える。

「春櫻も一緒か?」

「あら一瞬で分かった?」

露呑が聞く。

「当たり前だろ・・・。村塾のマドンナだったからな。」
「やめてよ。そんな言い方。」

露呑が笑う。

「じゃあ俺行くわ。」

ジラはそう言い、去つて行つた。

「晋助も変わりないか・・・。」

露呑はそう咳き、クスッと笑つた。

「昨日も散歩に言つて怪我して帰つてきたんだよ。」

露呑が言つた。

「あいつは本当に変わらないな。」

銀時が言った。

「変わったよ……だつて昔はあんなんじやなかつたじやん。」

露呑が言った。

銀時も曇つた顔を見せた。

「ねえ、銀時。昔に戻ると黙つて戦時中や村塾の時に……」

露呑が聞いた。

「あーな。それは、高杉の考えことやないだろ?」「そうだね……。」

露呑が言った。

「銀ちゃんなんか幸せそうネ。」

神楽が言った。

「銀さんがあんな顔するの見たことないです。」

新八も言った。

「私、もう帰らなきや。晋助に怒られる。」

露呑がさつて言った。

「春櫻。お前は露呑として生きてくのか?」

「つうん。ヅラや晋助、銀時たちと一人きりの時は春檜に寝るよ。 その方が私もいいもん。」

露呑が言った。

「そうか。」

銀時が言った。

そして、何か悩んだ後言つ。

「春檜・・・。顔貸して・・・？」

「いいよ。」

露呑が笑顔で言つた。

その様子を電柱の影で声をひそめてみる。

「本当にか？」

「うん。」

すると、銀時は露呑の体を引き寄せて唇に唇を重ねた。 それに露呑は抵抗しないで身を預けた。 その様子をあぜんと見る新ハたち。

「あれってキスですよねイ。」

沖田がぽかんと言つ。

「ああ・・・。」

土方も呆然としている。

「春榎　・　・　・。会えてうれしいよ　・　・　・。」

銀時が幸せそこの笑顔で言った。

「私も嬉しい！銀時・・・」

露香はそう言へ、銀時に抱きしめた。

「銀さん」てあんなことできるんですね。・・・」
新八が呟いた。

「銀時……。ありがとう」

銀時はそう言い、露呑を放した。
そして、露呑は背を向け歩き出した。
その後すぐ振り返り一言告げた。

「ねえ、銀時。お前らは限まないのか・・・。この世界を限まないのか。」

そう言い、去つて行つた。

「恨んでるよ、春樓。お前と高杉を裏の世界へ連れ込んだこの世界を・・・。先生を奪ったこの世界を・・・。」

銀時は静かな声で言った。

誰のも聞こえないほど小さな声で・・・。

「で、お前、はみるだけか？」

銀時に不意に言われ、新ハたちは電柱の影から姿を現した。

「銀ちゃん。あの人斬り女。知り合いアルカ？」

神楽が聞いた。

「あいつは人斬りじゃねえーよ。ま、斬っちゃつたけど・・・。」

銀時が言った。

「どういふ意味だ？ つーか真選組の隊士を殺そうとしたんだよ。」

土方が怒りを含んだ声で言った。

「あいつは高杉の頼みなら何でも聞くって言いたいんですかイ？」

沖田が言った。

「半分正解。でも全部ってわけじゃねえーよ。あいつにひとつでは晋助は兄貴的な存在だから逆らいつときは逆らいつや。」

銀時が言った。

「あいつとはどんな関係だ？ あんなラブ・ラブして・・・。」

土方が聞く。

「初恋の相手だよ……。露香は……。俺の初恋の相手なんだよ。」

「初恋……。ならなんであるまでイチャつける?」

土方が聞く。

「両想いなんだよ、いまだにな。俺は今も好きだ……。露香のことが……。」

銀時が言った。

「せうか……。だがあの女は鬼兵隊。しかもいいとい身分だ。指名手配されんのは時間の問題だぞ。」

土方が言った。

「それはあいつも分かつてるだろ……。それでも高杉のもとで居たいんだよ。それがあいつだよ。」

銀時が言った。

「じゃ、けーるぞ。新八、神楽。」

そして、そう言い家へと歩いて行つた。

銀時は変わつてない……。

私の大好きな銀時だ……。

今も恋の相手だ・・・。

ねえ、晋助。

昔に戻れるかな?

第三訓 初恋の相手（後書き）

どうでしたか？

銀さんが・・・て自分で思いました・・・。

第四訓 散歩（前書き）

この話でも銀時が壊れます。

前話程でもありません。

第四訓 散歩

「露呑つていう娘。指名手配にするもな・・・。」

真選組屯所では幹部たちが会議を行つてゐる。
そこへ・・・。

「すいませーん。」

女の声が聞こえた。

近藤たちが外へ出ると・・・。

女は刀を抜いた。

それに対する反応する土方と沖田。

「反応すんの早いな。さすがつてとこだね。」

女は笑顔で言つた。

「お前・・・あんときの・・・。」

土方が呟いた。

「そうだよ。芦咲 露呑。鬼兵隊の總統補佐です。」

女の声に土方たちが顔を曇らせた。

「ま、今日は仕事じゃないから。」

露呑は白の袴に白の上、それに紺色の丈の長い上着を着てゐる。

「仕事じゃないってどういう意味だ。」

土方が首をかしげる。

「銀時に聞きたいことがあって。で、銀時の居場所を教えて欲しいんだ。」

露呑が笑顔で言った。

「それは無理だぞ。」

土方が言った。

その声で真選組が露呑を囲んだ。

「あつ、やっぱ無理かあ。」

露呑はそつ言い、堀に乗つかった。

「なんだ、そのジャンプ力……。」

土方が呟いた。

「攘夷戦争の時の愛称教えてあげる。私、破滅の副官って呼ばれてたんだから。晋助の右腕だよ、なめんなよ!」

露呑はそう告げ、走つて行つた。

「うーん。でも、どうじょうかな?」

露呑はプラプラ歩いてくると、田の前に「万事屋銀ちゃん」という店が・・・。

「可能性としてはあるよな・・・。」

露呑はそう呟き、階段を上って行った。
そして、チャイムを押す。

ピンポーン

「はーい。」

眼鏡の男の子、新ハが出た。

「あの、銀時居る?
あ、居ますよ。」

新ハは奥に行き、銀時を呼んできた。

「なんだよ、新ハ。って、春榎・・・。」

銀時が呟いた。

「春榎じゃない露呑だよ。」

露呑が笑顔で言った。

「なんで居んの?」

「なんでって用があるから来たの。」

露呑が言った。

銀時は露呑を中に連れ込んだ。

「銀ちゃん。この子、この間のラブラブしてた子アルカ？」

神楽が言った。

「そうだ・・けど・・・。」

銀時が少しアワアワしていた。

「クスクス。銀時かわいい。」

露呑が言った。

「な、なんだよ・・・。」

銀時が頬を赤くして答えた。

「で、あの・・・。露呑さんは・・・高杉さんの右腕なんですか？」

新八が聞いた。

「そうだよ。そう、今日は晋助についてなんだよ。」

露呑が言った。

「あいつがどうした？」

銀時が聞いた。

「また散歩。河上に探してきてつて言われちゃった。」

「高杉、本当に散歩好きだな。」

銀時が呟いた。

「今度、怪我したら殴つてやる。後説教だな。」

露呑が言つた。

銀時が苦笑いをしている。

そこで、またチャイムが鳴つた。

「万事屋……そこに芦咲 露呑居るか?」

土方が言つた。

「居るけど……。」

土方たちはその答えを聞きドアを打ち破つた。

「あーらーのー!!」

沖田が声を上げた。

「いきなりですか?」

露呑が呆れた声を出す。

「お前な・・・。またなんかやつたのか?」

銀時が呆れ顔をしている。

「刀、持ち歩いてるだけだよ。」

「今、廃刀令だぞ。」

沖田が呟いた。

「きょう、スナック空いてるかな?」

近藤が言つた。

「近藤さん、関係ないと思いますぜイ。」

沖田が言つた。

「姉御は仕事あるつて言つてたアルヨ。」

「つーか、今日、何日だ?」

銀時が言つた。

「えつと・・・8月10日です。」

新八が言つた。

「あ～～～～！～～～！」

露呑が大きな声を出した。

「露呑?」

銀時が聞く。

「今日、晋助の誕生日だ……。」

露呑が言った。

「アイツ萩に居るのか……。」

銀時も呟いた。

「私、行つてくる。」

露呑はそう言い、走つて行つた。

「おー、春榎じやなくて露呑……。」

銀時が言った。

「あー、銀時ありがと。好きだよ……。」

露呑は一瞬振り返つて、告げて、走つて行つた。

「銀ちゃん?」

神楽が銀時の方を見ると、頬を赤く染めていた。

「銀さん、おーい……。」

新八が大きな声で言つとやつと普通に戻つた。

「あ、おお・・・。」

銀時はあいまいな微笑みを見せた。

「で、あいつは・・・。」

土方が呟いた。

「高杉は・・・小也なころにある約束をしてんだよ・・・。大きくなつたら誕生日に先生と酒を飲むという約束をな。」

銀時が呟いた。

そして、萩では・・・。

「晋助・・・。」

田が沈み始めている。

高杉は焼けている村塾の前に居た。

「・・・春榎か。」

高杉が呟いた。

「酒飲んでるの・・・?」

露呑が聞く。

「ああ・・・・。約束したからな・・・・・、先生と・・・・。」

高杉が言つた。

「そつか。」

露呑は一言やう言に隣に座つた。

「あつ、鬼嫁・・・・じやん。」

露呑が呆然とした。

「いつもはな安物なんだけどよ、今年は20回忌だからな・・・・。」

高杉が言つた。

「そうだね・・・・。」

「お前も飲むか?」

高杉が聞いた。

「ううん。これは晋助と先生がやるべきだよ。」

露呑が言つた。

「なあ、春榎。」

「ん?」

「久しぶりにあす」いかねえーか。」

高杉が言った。

「いいよ。」

露呑も答えた。

そして、日が沈みきった時……。

「きれいだね……。」

「ああ……。」

二人は河川敷で星を見ている。

「昔もこうやってみたよね。」

「ああ……。先生と……ジラや銀時と……。」

高杉が言った。

「晋助……。今、ひとつ言ひ……。散歩言ひて怪我したら……。殴るから。」

露呑が言った。

「なんで今言つんだ……。」

「別にいいじゃん。」

露呑が呟いた。

「お前は……銀時が好きか?」

高杉が聞いた。

「うん。好きだよ。」

露呑が言った。

「でも、私は晋助のそばに居たい。元馬とも約束したしね。」

露呑が付け足すように言った。

「そうかよ。」

「うん。」

銀時。・・・。

私はさきつと銀時の横には居れない。

それが・・・私の運命だと思つ。

でも・・・好きつて言つて気持ちは変わらない。

ねえ、銀時。

私は晋助の右腕として・・・

頑張るよ。・・・。

晋助に恩を返すのが私のやること。・・・。

第四訓 散歩（後書き）

どうでしたか？

ここに露呑の紹介

芦咲 露呑・・・25歳の160cm。

1月2日生まれ。

露呑は偽名で本名は芦咲 春榎。

仕事の時は敬語のお嬢様口調になる。

それ以外は男の子ぽくなる。

桂、銀時、晋助、辰馬と一人きりの時などは春榎としている。

白の袴と白の上に丈の長い紺の上着を着ている。攘夷戦争時代は高杉の上着なしに白の丈の長い上着を着ていた。

感想お願いします。

第五訓 商談

「あら、仕事サボついらつしゃるの？」

沖田が河川で昼寝をしていると、声が聞こえた。
沖田がアイマスクを外してみると・・・。

「芦咲・・・露呑・・・。」

沖田が呟いた。

露呑は赤色の着物を着ていた。

「クスクス。一番隊の隊長さんってお昼寝がお好きなのね。」

露呑は笑いながら言った。

「お前は何をしてるんでイ？」

沖田が聞いた。

「サボりよ。」

露呑は笑顔で言った。

「サボつていいんですかイ？」

「別にいいのですよ。それに、今は自由時間ですよ。」

露呑が言った。

「自由時間?」「

「ええ、そうよ。」

露呑が言つた。

そこへ・・・。

「姉様〜!!!」

黄色の髪の女〜来島 また子がやつて來た。

「あら、また子。」

「あ〜〜。幕府の狗、お前姉様に何してんスか?」

また子が声を上げた。

そのまた子も桃色の着物を着ている。

「クスクス。また子、そんなんじゃないわよ。お話していたの。」

露呑が笑顔で言つた。

「白夜叉に怒られちゃうシスよ。」

また子が言つた。

「クス。そうね。じゃあな、一番隊のおおせきつせん。」

露呑がそう言い、去つて行つた。

「露呑つてよく分からない人ですね〜。」

沖田はそう呟いた。

そして、露呑とまた子は・・・。

「リーツスか？」

また子が言った。

「セウス。」

二人がたどり着いたのはターミナルの船の場所。

「すいませーん。快援隊つてここにありますか？」

露呑が言った。

「いります。」

そう言ってやつてきたのは笠をかぶった女人だった。

「わしは陸奥じやき。」

女人人はそう挨拶をした。

「私は芦咲 露呑といいます。」ちらが来島 また子です。
「こんにちはツス。」

また子が元気に挨拶をした。

「で、お求め物はなにがか?」「」

「」

露呑はそつ言い、メモを渡した。

「じゃあ、今頭を呼んでくれ。」

陸奥はそつ言い奥へと入つて行つた。

そして、奥から来たのは・・・。

モジヤモジヤ頭の男だった。

「なんじや。高杉のとこじやなか。」

モジヤモジヤの男へ坂本 辰馬が言つた。

「クスクス。そつなのよ。で、辰馬。そのメモのやつよみこへお願いできるかしり。」

「別にかまわんき。つい、えつ?」

辰馬が間抜けな声を出した。

「おんし、なぜわしの名を知つちやうがか?」

また子と露呑が顔を見合せた。

「辰馬・・・。私の」とお忘れ?」

露呑が言つた。

辰馬はサングラスを押さへよく顔を見た。

「おんし・・・。春榎がか?」

辰馬が聞く。

露呑が「クツ とうなづいた。

「今は芦咲 露呑つて言つたよ。鬼兵隊の總統補佐ですの。」

「白夜叉とはラブラブッスよ。」

また子が言つた。

「また子。余計な事言わないいのよ。」

露呑は頬を染めて言つた。

「アハハハハハ。金時とは相変わらずが。」

「辰馬もからかわないでくださいます。」

露呑が言つた。

「で、何に使うがか?銃の弾なんか。」

辰馬が聞く。

「これは、また子のなのよ。拳銃使いですの。・・・。」

「そうッス。」

また子が元氣よく言つた。

「ねえ、また子。一人してくれます?」

露呑が言った。

「いいッスよ。」

また子はさう言ひ、部屋から出て行つた。

「ねえ、辰馬。これは事実じゃないんだけど……。今ねある噂が流れてるの。」

「噂がか?」

辰馬が聞いた。

「うん。晋助も知ってるんだけどね。今日はそのことも聞こえたの。」

「

露呑が言つた。

「一体何がか?」

「六鬼神を狙つてゐる攘夷志士が居るらしいの……。」

露呑が言つたら辰馬が顔を曇らせた。

「晋助がね……。辰馬に云えておけつて。」「なぜわしに?」

辰馬が聞く。

「私と銀時それに、龍銀は名前がばれてないから辰馬やジワは言った方がいいって」とうそい・・・。」「

「そのがか。」「

辰馬が呟いた。

「私、もう行くね。辰馬・・・気をつけよ・・・。」

「分かつたき。」

露呑は辰馬を背に歩いて行つた。

辰馬・・・。

私は辰馬との約束護るよ・・・。

そのため、元でいることをやめる。

第五訓 商談（後書き）

どうでしたか？

辰馬と露呑の出合いでした。

感想お願いします。

第六訓 心配事

「ただいま。」

露呑が鬼兵隊の船へ戻ってきた。

「お帰りでござる。」

河上が言った。

「晋助はどうぞ。」

露呑が聞く。

「晋助なら甲板でござります。」

河上が言った。

「分かったよ。」

露呑はそう言い、甲板へと出て行つた。

「晋助、今戻つたよ。」

「そうか・・・。」

いつも道理冷たい声が聞こえた。

「ジラの方はどうだつた? 嘘瞞してない?」

「ククク・・・。ジラにはつまく言えた。運よくな銀時にも言えた

ゼ。」

高杉が言った。

「いいなー。銀時にも会えたんだ。じつはなんか辰馬私のこと忘れてたよ。」

露呑が呆れたように言った。

「ククク。あいつは相変わらずだな。」

「クスクス。そうだね。」

露呑が笑った。

その後、沈黙が続いた。

「ねえ、晋助。」

「なんだ？」

高杉が聞き返す。

「なんで今頃六鬼神なんか・・・集めるのかな?」

「知らねーよ。」

高杉が無愛想に言った。

「龍銀、何を思つて生きてるのかな?ビヒヒてるのかな?」

露呑が静かな声で聞いた。

「俺も知らないよ・・・。」

高杉が呟いた。

また沈黙が続いた。

「俺らも中に入るか？」

「うん。」

露呑は領き、高杉の後について行つた。

一方、銀時と桂は・・・。

「高杉がなにを言つと思えば六鬼神をな・・・。」

居酒屋で桂が呟いた。

いつも道理変装をしている。

「その野郎何をやる気なんだ？」

「わけのわからない攘夷志士だ。俺らを集めて何になる。」

桂も銀時もいつもより真面目な顔をしている。

「龍銀、何をしてるかな？」

「さあーな。俺のもそんないとあ分かんねーよ。」

銀時がぶつかりぼうひと言つたがどこか心配してゐるような声だった。

「じやあ、そんそんやめにしないか。もう酔つてきた。」

桂が言った。

「そうだな。」

銀時もそう言い一人は居酒屋を後にした。
別れ際、銀時が言つ。

「オメーの事だから心配はしねーが気をつけろよ。」

「フン。貴様もな。」

桂が言つて二人は別れた。

そして、かぶき町から離れた萩では・・・。

「六鬼神をねえー。そんなどしてなになんのか・・・。」

一人の青年が呟いていた。

「ま、兄貴の事だから平気かな?平気じゃないか・・・。」

青年の髪は綺麗な銀髪だった。

「かぶき町に行つてみるか・・・。」

青年はそつ呴き闇へと消えていった。

第六訓 心記事（後書き）

どうでしたか？

この物語では高杉率いる鬼兵隊は微妙なところです。

大体は仲間・・・。

そして、活動報告にてアンケート実施中。

感想お願いします。

第七訓 面壁するほど仲がいい（前書き）

銀さんたちの子供時代です。

第七訓 面接する晋助がいい

『晋助～！お・き・る～！』

朝から晋助の部屋では春榎が声を上げる。

『なんだよ？春榎。』

『なんだよじやないよ。早くしなことじい飯なくなつちやんひよ。』

春榎が呆れたように言った。

『もお。分かった。』

晋助はやっと布団から起きた。

『おはよ～、晋助。』

朝から笑顔で松陽先生が言った。

『おはよう。』

銀時たちも笑顔で言った。

『おはよ～。銀時、ヅラ、つらつら龍銀。』

晋助もまだ眠そうだ。

『晋助はほんとー朝に弱いー！』

春榎が元氣よく言った。

『それはオマーが強いだけだろ・・・。』

晋助は眼を擦りながら言った。

『そりかもね。』

銀時が言った。

春榎も頬を膨らませて反抗した。

『なによ、銀時。私に対しての嫌味?』

『そんなんじやねーよー!』

銀時が言った。

『本当に?』

『本当だつて。』

一人は口げんかになりそうになる。

それを、松陽先生が止めた。

『春榎、銀時。いい加減にしなさい。晋助、顔を洗つておいで。』

『はーい。』

子供たちが元氣よく返事をした。

『じゃあ、『飯にしますよ。』

『はーい。』

この日の朝ごはんはご飯と煮物。煮物は先生の得意料理。

煮物は先生の得意料理。

「どうか煮物しか得意じゃない。一応、他のも作れるけど……。」

『やつぱ先生のはねこしい。』

晋助が笑顔で言つた。

「」飯を食べた後は塾である。

塾では松陽先生が遺伝子が受け継がれていた。

その授業を真剣に聞いている小太郎。

居眠りしている銀時。

銀時ばかり見ている春櫻。

卷之三

授業が終わつてから小太郎が銀時に聞いた。

『聞いてた、聞いてた。あの遺伝子がどこのどののってのだろ?』

銀時が言つた。

「嘘だよ。兄ちゃん寝てたもん。」

そこで、龍銀がチクつた。

『はあ、やつぱりか。』

小太郎が呆れ顔で言つている。

『先生の授業は子守唄かよ。』

晋助が呟いた。

『銀時にとつてはなんでも子守唄だよ。』

春榎が呆れるように言つた。

『なんだよ、みんなそろつて。俺に嫌味とかあんのかよー。』

銀時が言つた。

『別に！』

春榎が言つた。

また二人が口げんかになりそうになる。

『喧嘩すんなよ。』

小太郎が言つた。

『ヅラは黙れ。』

春榎が言つた。

『そつだ、ヅラにや関係ねえーよ。』

『俺つて一体何だ？』

小太郎が晋助に聞いた。

『ヅラをかぶつてゐる人。』

晋助があつたり言つた。

『俺のは地毛だ！』

小太郎が怒鳴り晋助に飛んだ。

ゴツン。

『いつてえーーー！』

晋助が声を上げた。

『フン。さつきのは晋助が悪いーーー！』

『かんぺきにヅラが悪いだろーーー！』

晋助が怒鳴つた。

『晋助、兄ちゃん、ヅラも春榎も、やめなつてーーー！』

龍銀が止めに入った。

それにより喧嘩は特大サイズになつた。

『春榎のバカーーー！』

『銀時の間抜けーーー！』

『晋助は人の気持ちを考えてないから痛い目にあうんだ！』

『なんだよ。このヅラ！』

『いい加減にしろよ、お前りあーーー』

喧嘩は夕方まで続いたとさ。

第七訓 画壁するほど仲がいい（後書き）

どうでしたか？

ちつちつや 一頃の銀さんもヅラもかわいいですよね。

ヅラは優等生からなにがあつたら妄想全開キャラにならんただひとつ・

感想お願いします

第八訓 仲直り

「はあ～。」

「5回目・・・。」

鬼兵隊の甲板で露呑と晋助が並んで座っていた。

「数えてたの？」

「ああ。5回分の幸せが逃げたぞ・・・。」

晋助が言った。

「そんなことないよ。私は幸せがいっぱいだよ。」

露呑が膨れて言った。

「そうかよ・・・。で、なんでため息をついてんだ？」

晋助が聞く。

「六鬼神のことについてね・・・。」

「そうか・・・。」

晋助が呟いた。

「私は・・・、何ができるのかな？」

露呑が呟いた。

「お前はお前にしかできねえ一事があるんじゃねえのか？」

晋助が言った。

「えつ？」

「お前は俺の支えでもあり、銀時の彼女でもあんだぜ。俺らをつなぎ止めんことができるのはお前しかいないんだよ。」

晋助が言った。

「晋助は銀時たちと仲直りしたいの？」

露呑が聞く。

「あーな。したいのかもな・・・、お前にそんなこといつなんて。」

「

晋助が呟いた。

「クスクス。晋助は子供だね。」

「どうこいつことだよ？」

晋助は頬を膨らませた。

「やつこいつこいつが子供。」

露呑が笑いながら言った。

「お前だつて膨らませるだろ？」

晋助が言った。

「やうだけど・・・。なんていうか・・・、晋助が子供に見える。女の母性本能つてやつかな？」

露呑が笑顔で言った。

「母性本能ねえ・・・。」

晋助が呟いた。

「だから、私のもとから離れないでね。」

「ククク。銀時が泣くぞ。」

晋助が言った。

「恋愛感情じやないよ。それに、晋助に恋愛感情は抱かない。」

露呑が言った。

「ひでえーな。」

「やうかなあ？」

露呑が笑顔で言った。

銀時、ヅラ。

もしかしたら、昔に戻れるかも・・・。

晋助の魂はまだそこにあるんだよ。

村塾に、攘夷戦争の時に・・・。

だから・・・。

私は、晋助をそばで支える。

また、みんなで笑えるように・・・。

第八訓 仲直り（後書き）

どうでしたか？

感想をお願いします。

第九訓 会議（前書き）

この話でオリキャラ龍銀の詳しいことが分かりますよ。

第九訓 会議

「ふあ～。暇・・・。」

露呑が暇そうに歩いている。

「春櫻。」

「ん？ つて、ヅラ。」

露呑が言つた。

「ヅラじゃない、桂だ。」

「いい加減あきらめたら？」

露呑が呆れたように言つた。

「それは、どうでもいいんだ。晋助にひとつ伝言を頼む。」

桂が言つた。

「伝言？」

露呑が不思議そうに首をかしげた。

「ああ。明日、万事屋銀ちゃんで会議を開くつてよ。」

「万事屋銀ちゃん？ ああ、銀時のとこね。でも、会議つて？」

露呑が聞く。

「六鬼神のあの事が本当っぽいんだ。その会議だ。」

桂が言った。

「本当なんだ。分かつた。言つてみるよ、どんな反応するか分かんないけど・・・。」

露呑が言った。

「ああ、頼む。」

桂はそう言い去つて行つた。

「六鬼神だとお？」

真選組の真選組の屯所で土方が声を上げた。

「あつはい。最近攘夷浪士の動きが怪しかつたんで調べたら六鬼神とこう名前が出てきたんです。」

山崎が説明する。

「トシ。あす、総悟と俺らで緊急会議を行つ。」

「はいーーー。」

「銀さん。今日誰か来るんですか？」

次の日の朝。

新八が聞いた。

「ああ。ジラと辰馬、あとはその他もろもろ。」

銀時がだるそう言った。

「その他って誰ですか？」

「すぐわかんぞ。」

銀時が言つた。

「邪魔するぞ。」

桂が入つてきた。

「桂さん。」

その後ろからは・・・。

「アハハハハハ。邪魔するぜよ。」

「坂本さん。」

「なんでもつさんが出るアルカ?」

神楽が聞いた。

「いやー。わしも良く分からんぜよ。」

辰馬が笑顔で言つた。

「あつ。辰馬たちもう来てたの？」

「さうしてその後ろから女の声が聞こえた。

「ククク。次会つたらぶつた斬るんじゃなかつたのかア？銀時にヅラ。」

女の後ろからは冷たい声がした。

「高杉、春櫻。」

銀時が呟いた。

「一時休戦だ。以上事態だからな。」

桂が言った。

「ククク。違いねえ。」

高杉が呟いた。

「さあーて。会議どきましょつか。」

露呑が笑顔で言った。

「ああ。」

そして、真選組の屯所では・・・。

「会議するつて言つたて六鬼神が誰か分からんんですぜイ？」

沖田が言つた。

「まあ、それはあるが・・・。」

土方が呟いた。

「攘夷時代活躍した人なので可能性としては曰那、高杉、桂。そして、坂本辰馬だと思いますが・・・。」

山崎が呟いた。

「俺が教えてやろーか？幕府の狗よお。」

窓側から冷たい声がした。

高杉よりも少し高い声で・・・。

真選組が振り返るとそこに居たのは・・・。

「高杉・・・？それとも曰那ですかイ？」

沖田が言つた。

「残念どつちもハ・ズ・レ。」

声の主は楽しそうな声で言つた。

声の主は銀髪の髪に薄い青の眼、髪はストレートでボーテールにしている。

なにより、死んだ魚の眼・・・。

「まあ、間違つのも当たつ前だよねえ。」

「の青年は「六鬼」しながら言つた。

「で、六鬼神について知りたいんでしょ？取引しない？」

青年はとても楽しそうに言つた。

「取引だと？」

土方が田を細めた。

「せつ。お前らが坂田 銀時の居場所に案内してくれたら俺が六鬼神について教えてやるよ。どうあるへん？」

青年は一矢つとしながら言つた。

「本当に教えてくれんだよな？」

土方が言つた。

「ああ。侍に「青年」ねえ。」

青年はこうしおながら言つた。

「じゃあ、つこへー。」

青年が土方たちに案内されたのは万事屋銀ちゃん。

「えりだ。」

土方はそう言つと、強引にドアを開けた。
玄関にはたくさん靴が並べてあつた。

「来訪中か？」

土方が言つた。

青年は奥から聞こえる声に耳をすませた。
そして、息を呑む。

（ヤベッ。）

土方たちは断りもなくあつさりと奥のドアを開けた。
そして、眼を見開く。

「おいおい。多串くん、チャイムも鳴らわないのかい？」

銀時が呆れながら言つた。

「万事屋こいつあビリコウことだ？」

土方が言つた。

「いやそれはな、つておわつー。」

銀時の言葉を何かが遮つた。

銀時がかわしたものを高杉がキャッチした。

「！」こつあ。」

高杉の手に握られてたのは十手だつた。
それを見て銀時も目を丸くしている。
そして、飛んできた方に目を向けてた。

「龍銀・・・・・。」

銀時が呟いた。

「やつぱ兄貴は兄貴だなあ・・・。俺のことちやんと覚えてくれて
た。」

青年は笑顔で言った。

「覚えてるに決まつてんだる？この世でただ一人の血のつながつた
兄弟だからな。」

銀時が言った。

「ブラコンが・・・。」

高杉が後ろで呟いた。

「誰がブラコンなんだ？ちび助。」

銀時が挑発するように言った。

「なんだとこの天パやろーが。」

高杉が言った。

「つーか、兄貴の天パは相変わらずだねえー。」

「お前は分かんねえーだろーが。天パは大変なんだぞ。」

銀時が言った。

「分かんないよ。だつて俺、ストレートだもんね。」

その様子を呆然と見る新八に神楽。
そして、真選組の人たち。

「おい。お前、一体誰なんだよ?」

土方が言った。

「ああ、言つてなかつたつけ?俺は坂田 龍銀。^{りゅうぎん}銀時の血のつなが
つた弟だよ。似てるだろ?」

龍銀が笑顔で言った。

沖田がよく見る。

「ホントですゼイ。死んだ田や銀髪とか・・・。眼の色は違うんで
すねイ。」

土方が呆然として見てている。

「つーか、お前らなあー。会議の邪魔してんじゃねえーよ。」

銀時が言った。

「憑い……で、六鬼神ってなんなんだ？」

土方が聞いた。

「もう前に居るじやねえーかよ。」

龍銀が言った。

「は？」

土方たちが間抜けな声を出す。

「だ・か・ら。前に居るじやねえーか。」

「どういう意味ですかイ？」

沖田が聞く。

「つまりよ『おい、言つていいのか？ あ？別にいいんじやね？』

龍銀の声を桂が遮った。

「まあーな。いつかはばれることだしな。」

高杉が言った。

「ナウこのひのひのひのほジラだけだよ。」

春榎が言った。

「ジラジラってことだな。」

銀時が呟いた。

「お前ら俺に恨みでもあんのか？」

桂が聞く。

「ある……。」

全員がそろって言った。

「俺って何？」

「とにかく、俺はそこの幕府の狗と取引やったの」

龍銀が言った。

「お前が言いたきや言えぱいい。」

銀時が言った。

その後、龍銀の方を見て、ニヤッと笑った。

「じゃ、言つちやう。六鬼神つーのはここに居る俺、兄貴、春榎、晋助、辰馬にジラ。」の6人が六鬼神なんだよ。」

龍銀が言った。

「えつ？銀さん本当ですか？」

「銀ちゃん、昔の有名人アルカ?」

「旦那。マジですかイ。」

3人が一斉に聞いた。

「お前ら、俺は聖徳太子じゃねえーんだけど・・・。」

銀時がダルそうに言った。

「全部ホントのことだよ。ならば証拠でも見せるか?」

龍銀は咳き、銀時たちの方を見てニヤッと笑った。

銀時たちは全員うなずいた。

そして、懐から一つの鉢巻を取り出した。

「ククク。お前でも持つてたのかよ。銀時イ。」

「当たり前だ。御守りみたいなものだかんな。」

銀時と高杉が笑いあう。

「これ、六鬼神の証。」

龍銀はそう言い、自分のを見せた。
鉢巻には字が書いてあつた。

『俺らは六人でひとつ』 つと・・・。

「てか、辰馬も懐に入れてたんだ。」

露呑が言った。

「アハハハハハ。以外がか？ま、金時の言つよつに御守りみたいなものじゃからの。」

辰馬が言つた。

「おい、辰馬。何回言つたらお前は理解すんだ？俺は銀時だつて言つてんだろーが。」

銀時が怒り混じりに言つた。

「アハハハハハハ。今度からは氣をつけろや。」

辰馬が笑い顔で言つた。

「で、お前ら真選組はどうすんの？ここに攘夷志士が3人は居るしよ。ま、捕まえてもいいんだぜ？」

銀時が挑発するように言つた。

「それは・・・」

土方が口にれる。

「幕府の狗のくせによ・・・。」

龍銀が呴いた。

「オメーが一番、攘夷志士ぽいですゼイ。」

沖田が言った。

「えつ？ 高杉の方が攘夷志士のオーラ出しまくってるけどな。」

龍銀がなんで？ といつ顔で言った。

「俺のどじがオーラ出してんだ？」

高杉が言った。

「その顔からそういう思ひナビ・・・・・。」

龍銀が言った。

「お前な・・・・。昔から全然変わつてねえーな。」

高杉が言った。

「それが、俺のとりえだかんな。」

龍銀がニヤッと笑いながら言った。

そんな中、土方が口を開いた。

「少し考え方せろ。」

「悪いが・・・俺らにも時間がねえーんだ。」

銀時が言った。

真選組が驚いた顔をしている。

「（）まで六鬼神の話が広まつてると・・・俺らの周りがあぶねえ・

・。」

銀時が顔を下に向けながら言った。

「銀さん・・・。」

「銀ちゃん・・・。」

新ハと神楽が心配そうな顔をしている。

「お前らが心配することなんてねえーよ。」

銀時が一人の頭に手を置いた。

「ま、ともかく。今日はこりりでお開きにしねえーか?」

銀時が言った。

「じゃ、俺はこり居候させてもひつな。いいだろ?兄貴。」

龍銀が言った。

「別にいいよ。勝手にしろ。」

銀時が言った。

「じゃあ、真選組さつさと帰れ。ヅラに高杉たちもだぞー。」

銀時が居た人たちを帰らせる。

「じゃーな、銀時。」

桂たちがそう言い、帰つて行つた。

「な、兄貴。もう俺らを置いてくなよ。」

龍銀が銀時に向けて呴いた。

「ああ。分かつてゐよ・・・。」

兄貴・・・。

俺は、兄貴が大好きだ。

俺は、俺の大事な人をどんな手を使ってでも護る。

それが、俺の武士道だ。

第九訓 会議（後書き）

どうでしたか？

個人的に龍銀は高杉と銀時の間くらいの性格にしたいと思います。

感想お願いします。

第十訓 怪我（前書き）

高杉が壊れてる……。さがする……。

第十訓 怪我

「ククク。あのヤローは何も変わつてなんかいねえーな。」

万事屋からの帰り道、高杉と露呑が並んで歩いていた。

「クスクス。男なんか変わんないのが一番いいんだよ。」

露呑が笑いながら言った。

「アイツの武士道も変わつてねえーのかな。人を殺してでも大事なものを護るといつその歪んだ愛情による武士道がよ。」

高杉が呟いた。

「変わつてないと思つよ。昔から頑固だもん、あいつは・・・。」
露呑が言った。

「そういうや、ジワと銀時。晋助に向かつてぶつた斬る直撃してたんだ・・・。」

露呑が呟いた。

「ああ。紅桜の時にな・・・。」

高杉が言った。

「紅桜かあー。あん時は私は別行動だつたから良く分かんないけど

さあ・・・。晋助さ

怪我したよね・・・。』

露呑が呆れたように言った。

「お前にことん怒られたことしか覚えてねえーよ。』

紅桜の事件の直後。

『晋助！お前バカだろ。バカの中のバカだろ。』

露呑の声が響いた。

『いや・・・、それは・・・。』

高杉が口ごもる。

『言い訳は聞かないよ。全治1週間。もし、教本がなかつたら死んでたかも知れないんだよ。』

露呑が怒った口調で言った。

『だから、それはな・・・。』

『言い訳は聞かねえ言つてんだろーーー。』

露呑が壁を殴る。

『なんで、俺が怒られるんだ・・・。』

高杉が呟いた。

『なんか言つた?』

露呑が言つた。

高杉が顔をこわばらせる。

『イヤ何も言つてねえ・・・。』

高杉が言つた。

『大体、また子も武市も大怪我なんだよ。誰のせい?』

露呑が言つた。

『俺のせいじゃねえ。それは、岡田の・・・。』

高杉が言つた。

『ま、それはいいよ。だけど、晋助。銀時に何やつた?』

露呑の眼には怒りがしつかりと含まれていた。

『俺は銀時はやつてないからな・・・。そこそこ勘違いすんじゃねえよ。』

『分かつてるけどよ。ま、いつか。』

露呑が言つた。

『諦めんの早いな・・・。』

高杉が呟いた。

『でもね・・・。次、銀時に何かやつたら・・・私が許さないよ。』

露呑の眼は真剣だった。

「そんなことあつたな・・・。」

高杉が呟いた。

紅桜。

その一件から晋助と銀時たちの溝が深まってしまった・・・。

でも、それでも・・・。

元に戻れる日が来る・・・。

私はそう信じるよ・・・・・。

第十訓 怪我（後書き）

どうでしたか？

感想をお願いします

第十一訓 温泉（上）（前書き）

温泉の話です。

神威と神楽は微妙に仲がいい設定です

第十一訓 温泉（上）

「銀さん……。帰りましょう……。」

新ハが言った。

新ハと銀時、神楽、九ちゃん、お妙、龍銀は温泉に来ていた。男の脱衣所に入った瞬间、新ハたちは后悔した。脱衣所に居たのは……。

「貴様らまで来ていたのか。」

「久しぶりに温泉來たつーのに見知つた人だらけじゃねえーか……。」

「お兄さんも温泉くるんだ。」

「銀時殿は誰の肌身を見に来たんですか？」

「俺らは違うからね。慰安温泉だからな。」

「指名手配犯にあつてるがな……。」

「土方さん。俺らも少しの間休戦にしようとかいつたじゃねえですかイ。」

「アハハハハハハ。金時も龍金も温泉がかかる。」

桂、高杉、神威、東城、近藤、土方、沖田、山崎、辰馬だった。

「金時じゃない、銀時だつてんじゃねえーか。」「龍金つて誰のことだ!!」

銀時と龍銀が同時に言った。

「てか、皆さんそりつて何やつてんですか?」

新八が聞く。

「俺はお湯につかろうと思つてな、新八君。」

「俺は神威がきてよ温泉いきてえー言つから……。」

「私は若の付き添いです。」

「わしは陸奥を引き連れてのー。」

桂、高杉、東城、辰馬が言つた。

女子風呂では・・・。

「あ、むつちに露呑……」

神楽が言つた。

「銀時のところの……。」

陸奥と露呑が言った。

「あら？ 神楽ちゃん知り合い？」

お妙が聞く。

「そうネ。むつちがもつさんとの副官アル。で、露呑が銀ちゃんの彼女ネ。」

神楽が言つた。

「彼女なんて大げさよ。」

露呑が頬を赤くしながら言った。

そして、男子風呚では・・・。

「貴様、その傷どうした?」

桂が銀時に言った。

「ああ。これが?これは・・・あつ似蔵と殺り合つた時のな・・・。

」

銀時はそう言い高杉の方を見た。

「俺のせいじゃねえーから!」

高杉が言った。

「アハハハハ。ヅラもどつした?」

辰馬が桂の傷を指さしながら言った。

「これは・・・岡田にな・・・。」

桂も高杉の方を見た。

「俺のせいじやねえーからな・・・。」

高杉が言った。

「晋助。その腹の傷、どうしたの?」

龍銀が聞いた。

「これはヅラがな。」

高杉が桂を睨みながら言った。

「・・・・・悪かった・・・。」

桂が静かに言った。

「大体このせいじで春榎にメッチャ怒られたんだけど・・・。」

高杉が呟いた。

「ドンマイだ・・・。」

龍銀が言った。

でも、そんななか真選組の人たちの眼を集めたのは高杉の左目だつた。

いつもは包帯で隠している左目は深そうな傷があった。

「貴様、左目を出した方がカリスマ性があるわ。」

桂が言った。

「俺もそつ思つがな……春榎を傷つけたくねえ——からよ……」

高杉が言った。
かなしそうに……。

「神威だつけ。お前、肌白いな……。」

沖田が神威の肌を見て言った。

「夜兎の特徴だからね。」

笑顔で言った。

女子風呂では……。

「むつちつて髪の毛サラサラアルナ。露呑もネ。」

神楽が樂しそうに言った。

「神楽ちゃんだつけ?」

「そうアル。」

神楽が元気に答えた。

「神楽ちゃんもいい髪してるよ。」

露呑が神楽の髪を見ながら言った。

「今日ね、神楽ちゃんに似ている子も一緒に来ているの。」

露呑が言った。

「名前なんて言つアルカ？」

神楽が聞いた。

「神威だつけ？」

露呑が言った。

神楽が下を向いた。

「そいつ・・・私の兄貴ネ。」

「へえー。似てるのも当たり前ね。龍銀と銀時みたいね。」

露呑が笑いながら言った。

「私たちそんなに仲良くないアルコ。」

神楽が言った。

「そりなの？神威は気にしてるみたいだけど・・・。」

「えつ？」

露呑の声に神楽が声を上げた。

「兄妹つてそういうものなんだよ。」

露呑が笑つて言つた。

「わしら露天風呂に行つてくるき。」

陸奥が言つた。

「私たちも行く。」

露呑と神楽もついて行つた。

「やつぱ露天風呂つたらのぞきだよな・・・。」

近藤が言つた。

「私は違います。若を護るためです。」

東城が言つた。

「俺は違うよ。春榎の肌身何か見たくなーからな。」

そう言つ銀時の頬が赤かつた。

「わしは女なら誰でもいいき。」

辰馬が言つた。

「兄貴たちバカだよな。春榎に殴られるちゃつづーの。」

龍銀が呆れるよつに言つた。

「俺が先に見るんだ。」

近藤が言つた。

「若の裸を見ることは私が許しません。私ならいいですが・・・。」

東城が言つた。

「何私情を持ちこんでんだ?」

「そうぢよ。」

辰馬と銀時が同時に言つた。

そつなつて争つているとこに桶が飛んできた。

「ぐはっ。」

桶は近藤に直撃。

「づつ・・・。」

他の3人が声を上げた。

「東城、貴様何をやつているんだ。」

九ちゃんが声を上げた。

「銀時のバカア!!」

露呑の声が響いた。

「頭。おまんなにしづかうがか?..」

陸奥が怒つて、いの口調で言つた。

「近藤さん、いい加減にしてください。」

お妙が言つた。

「出たら覚えておけよ!..」

女全員が言つた。

銀時たちは顔を曇らせた。

第十一訓 温泉（上）（後書き）

どうでしたか？

感想をお願いします

第十一訓 温泉（下）

「痛い・・・。」

温泉を入り終わった後、銀時が呟いた。

「銀時が悪いの！！」

露呑が言つた。

「だから」と嘆息を吐いて歎くことはなくね？」

銀時が呟いた。

「変態は女の敵だよね？神楽ちゃん。」

「はい」アル。

神楽が元気よく答えた。

「お前ら二つから仲良くなつたんだ？」

高杉が聞く。

「女の子はすぐ仲良くなるのよ。」

露呑が元気よく呟いた。

「女つてすげえな・・・。」

龍銀が呟いた。

「そりだ。ねえ銀時、今日私と晋助泊つていい？」

露呑が明るく聞いた。

「いきなりかよ。つーか、お前らいいとこ身分じやねえーか。そんな奴が人のところ泊つていいのかよ？」

銀時が聞いた。

「いいとこ身分つて？」

露呑が聞いた。

「お前ら・・・。高杉は鬼兵隊の總統だしよ、春櫻は總統補佐・・・。そんな奴らが、船をでたらいけなくねーか？」

「別にいいの！大体また子も河上も一人でやつていけるから。」

露呑が元気よく言った。

「それに、たまには銀時と酒飲みたい！！」

露呑は付け加えるように言った。

「仕方ねえーな。ヅラも辰馬も来るか？今から万事屋で飲み会だ。」

銀時が言った。

「わしは行くぜよ。

「俺もだ。」

辰鳴と桂が言った。

第十一訓　温泉（下）（後書き）

どうでしたか？

次回は飲み会篇です

参加するのは銀時、桂、辰馬、高杉、龍銀、露香、神威、陸奥、神楽

新八、沖田、土方。

近藤さんは多分出でないとと思つな・・・。

感想お願いします

第十三訓 飲み会（前書き）

銀さんが壊れます・・・。

第十二訓 飲み会

「じゃあ、飲み会始めんつぞ。」

銀時が言った。

「よつしゃ。乾杯！！」

「乾杯！！」

グビグビ。

「つめえー。」

土方が言った。

「やっぱ酒ですねイ。」

沖田が頬を赤く染めて言った。

「お前未成年じゃないアルカ？」

神楽が聞く。

「そうですゼイ。」

「飲んだダメじやないアルカ。」

神楽が言った。

その隣で・・・。

「日本酒といつのはおいしけ。地球はおいしきものがいっぱいだな。ヒック。」

「兄貴・・・。兄貴も未成年アルヨ。」

神楽が呆れたように言った。

「お酒に歳なんか必要ないよ。ヒック。」

神威が言った。

短時間で酔いまくっている。

「神威。お前酒に弱いだろ・・・。」

高杉が呟いた。

「だ、大丈夫。ヒック・・・。」

神威は頬がだいぶ赤くなっていた。

「龍銀なみだな・・・。おい、龍銀は飲んでないよな?」

銀時が聞く。

「飲んでないって。ヒック。お酒なんか飲んだって、俺の場合いいことはないから、ヒック。」

龍銀が言った。

「貴様・・・。飲んだだろ。」

桂が呆れたように言った。

「のんてつてつてんだろ？ ヴラ、ヒック。」

「ヴラじやない、桂だ。」

「昔からホント龍銀は酒に弱いね・・・。」

露呑が呴いた。

「ククク。お前も人のこと言えないだろ・・・。」

高杉が呴いた。

「大丈夫。飲んでないから。」

露呑が笑顔で言った。

「アハハハハ。酒つて、ヒック。おいしいぜよ、ヒック。」

辰馬が言った。

「・・・。お前ら・・・。酒に弱いな・・・。」

土方が呴いた。

「俺と高杉は酒には酔わない派だが・・・。」

桂が言った。

「じゃあ、旦那は酔うんですかい？ ヒック。」

「

沖田が聞く。

「ああ。酒に弱い方だぞ。な、リーダー、新八君。」

桂が言った。

「はい。」

「はいアル。」

新八と神楽が元気よく答えた。

「兄弟そろつてといふことだよ・・・ヒック。」

龍銀が言った。

「ヒック、まあ。そういうことだよ・・・ヒック。」

銀時が言った。

「おーー酒持つてこいや。あん?」

龍銀が言った。

「みんないい加減にしてーーぶん殴るぞ、オラ。」

露呑が言った。

「はいーー。」

その一言で全員が静かになつた。

その後はとにかく・・・。

「俺、もうダメー。」

龍銀が横になつている。

「坂本、起きるぜ。いつまで寝るが?」

陸奥が寝ている坂本を揺さぶる。

「俺らはそろそろ帰る。後のこと頼んだぜ。」

土方がそう言い、万事屋を後にした。
その後ろに沖田が続く。

「じゃあ、寝るか?」

桂がそう言い、横になつた。

龍銀はもうすでに熟睡中。

「高杉、起きてるか?」

桂が聞く。

「クークー。」

高杉は寝息を立てていた。

「はあ、熟睡かよ。」

桂はそう言い、眼を閉じた。

「春櫻。起きてるか？」

「起きてるよ……。」

起きているのは銀時と露呑だけだった。

「なあ……。顔貸して……。」

銀時が言った。

「また？でもいいけど……。」

露呑が頬を染めて言った。

「そつか……。」

銀時はそう言い、体を近づけようとした。

「待つて。いつも銀時からやつてるとから今日は私がやる。」

露呑が言い、銀時の体に近づき唇に唇をくっつけた。

「おい、お前積極的だな。」

銀時が言った。

「それは銀時も一緒だよ。」

露呑が頬を染めて言った。

「みーちゃつた。」

龍銀の声がした。

「やつぱふたりは付き合つていてるアルナ。」

神楽が言つた。

「神楽ちゃん。銀さんだつて彼女ぐらゐ居るんですよ。」

新八が言つた。

「お前、ぐり・ぐり・起きてたな・・・。」

銀時が言つた。

「お前らは昔から変わらねえーな。」

龍銀が言つた。

「龍銀ー! 盗み聞きなんてひつどーーー! 」

露呑が言つた。

「もつ夜アルヨ。銀ちゃんも露呑も早く寝るアル。」

神楽が言つた。

「そだな。俺らも寝るか・・・。」

銀時はそう言い、横になつた。

神楽も露呑も龍銀も新八も横になつた。

やつぱり。

私は銀時が好き！！

第十二訓 飲み会（後書き）

どうでしたか？

キスシーンって書くのが難しい。

感想お願いします。

第十四訓 子供の元攘夷志士（前書き）

オリキヤラ三人目が出ます。

第十四訓 子供の元攘夷志士

『銀・・・?』

『すまねえ・・・。俺はお前ひを護つてやる血盟がねえ・・・』

『銀の嘘つきやイ・・・』
『銀の嘘ついて金元に響いた。俺の声はまだ響いてるんだ。』

俺の声はまだ響いてるんだ。

「10年ぶりかな?」

青年はそう言い、かぶき町を歩いていた。

「銀の居場所は確か万事屋銀ちゃんだったかな?」

青年はそう呟きながら道を歩いていた。

青年の髪は赤く、眼の色は綺麗な紫色をしていた。

「あつ、いいだ。」

青年はそつと音を立てて階段を上がり、上へと歩いて行った。

ピーポン

「はーい。」

新八が扉を開ける。

「あつと・・・・・。ここに坂田 銀時って人はいますかイ？」

青年はぺこりとお辞儀をして言った。

「いるけど・・・・・。熟睡中。昨日、銀さんの幼馴染が来て飲み会をやつたから。」

（幼馴染？まさかね・・・・・。）

「新八君。来客か？」

「ククク。ちゃんと依頼来てんじやねえーか・・・・・。」

「そんな言い方ないでしょ。」

「アハハハハハ。おまんは相変わらず厳しいの一。」

「恐いのも変わてないからな・・・・・。」

奥から5人の声が聞こえた。

「入つていいですよ。」

新八が言った。

「あ、はい・・・・。」

新八についていき中へ入った青年は部屋に着いたときには飛びこんでいた。

「つかひ。」

桂が声を上げた。

青年は眼から涙をこぼしていた。

青年は一人一人に指をさしながら言つた。

「お前・・・。」

桂がそう弦き青年の顔をよく見た。
その顔にある少年の面影を感じた。

「お前・・・源 みなもとのよしき 義希か？」

桂が聞く。

青年は涙でぬれた顔をで領ぐ。

「泣き虫治つてねえーんだな。」

高杉が呟いた。

「泣き虫言つな、このチビ助イーー！」

義希と言われた青年は元気な声で言つた。

「お前がチビ。」

高杉があつたり返す。

「えつ知りあいなんですか？」

新八が驚いた声を出す。

「ああ。攘夷戦争時代のな。」

桂が答えた。

「お前ひつむせーぞ。銀さん|口酔いなんだけビ。」

銀時がダルそうに起きてきた。

「あこーんーーー！」

義希は銀時に飛びこんだ。

「つあつーーー？」

銀時はそのまま後ろに倒れた。

「このバカヤローーーーお前のせいだ俺がどんだけ悲しんだのか分かってんのかイ？」

義希は田に涙をためて言った。

「お前・・・義希？本当にあの義希か？」

銀時が驚いたように言った。

「そり。あの泣き虫でチビの義希でさア。」

義希が明るく言った。

「懐かしい。全然変わつてねえーじゃねーか・・・。」

銀時は笑顔で言った。

「背も全然伸びてねえーな・・・。」

青年を見ながら銀時は呟いた。

「伸びてるでさア。ちやんと伸びてるでさア。」

義希が頬を膨らませて言った。

「でも、顔もあんまり変わつてないよね。童顔つてことかな?」

露呑が言った。

「ホントアル。新ハより全然子供顔ネ。」

神楽が呟いた。

「童顔じゃないでさア。それに、未成年だからこれくらいがいいんでさア。」

義希が反抗していった。

「てか、銀ちゃん。この人だれアルカ？」

神楽が聞く。

「ああ・・・。語んのダリーから自分で言つてくれや・・・。」

銀時が言つた。

「はあー。相変わらずだねイ。えっと俺ア、源 義希。歳は19で
れア。」

義希が言つた。

「桂さん。さつき攘夷戦争に出でるつて言つましたよね・・・。」

新八が言つた。

「言つたが・・・？」

桂が不思議そつに言つた。

「嘘じやないですか！だつて出たのは今から十年前ですよね。計算
合わぬないですか？」

新八が聞く。

「合ひでせア。だつて俺、9歳で出でるからねイ。」

「えつ・・・。9歳で？」

新八が間抜けな声を出す。

「そりだよ。『イツまぎれもなく9歳で攘夷戦争に参加してるんだから。』

銀時がダルそうに言つた。

「メツチヤ強かつたよね。ねえ銀時。」

露呑が言つた。

「ああ、刀なんか振り回したらそりやす」かつたぜ。」

銀時が言つた。

「お世辞はいいでさア、銀時。」

義希が笑顔で言つた。

「で、聞きたいことがあるでイ。」

義希はいきなり大人っぽくなつて聞いた。

「六鬼神を狙つてる奴が居るつて奴。あれ本当の話かい？」

「ああ。」

桂が言つた。

「お前さすがだな・・・。情報収集はもつてこいだもんな・・・。」

高杉が呟いた。

「じゃあ、このことア知つてるかい？」

義希がニヤツと笑つて言ひ。

「そいつらが特に欲しがつてんのが『日華』の隊長つてこと。」

「んだとおーー！」

桂、高杉、露呑、龍銀が同時に叫ぶ。

「おい、なんで日華を狙う？ そんな有名じやねえだろ？」

桂が聞く。

「これは俺の予想だけど……。そいつらは六鬼神を使って大規模なテロを起こすつもりだと思うんでさア。」

義希が言った。

空気が一気に重くなる。

「あの……桂さん。日華つて？」

新八が聞く。

「日華というのは攘夷戦争時代に銀時が率いた部隊の事だ。龍銀も義希もそこに所属していてな龍銀が『第一の白夜叉』義希が『殺しの情報屋』なんて呼ばれていたな。」

桂が大人っぽく言った。

「じゃあ。狙つていいのつて……。」

「ああ。銀時の事だ。」

桂が言った。

「つーか、なんで俺?」

銀時がダルそうに聞く。

「知らねエーでさア。」

義希が呟いた。

「ともかく。俺らはさりげに警戒しなきゃなんなくなつたな、特に銀時。お前は絶対、油断すんなよ。」

桂が言った。

「わーつてゐ。つーか、義希。お前どうすんだ?」

銀時が言った。

「うーん。邪魔じやなかつたら面倒させてくれや。」

義希が言った。

「やあ。さつなるか……。仕方ねえ。第一の弟みてーなもんだからな……。」

銀時が言った。

「せうだ。俺らはやうやうお話をせてもいい。じやーな銀時。」

桂はそう言いで出て行つた。

「わしらも帰るがか。」

辰馬と陸奥も帰つた。

「銀時。気をつけてね。」

「テーマの事だから心配はしねえーよ。」

高杉と露呑も帰つて行つた。

「日華つて誰がつけたなんですか?」

全員が帰つた後、新八が聞いた。

「俺ですぜイ。日華の『日』は銀色。『華』は赤色。俺ら3人の髪の色をとつたわけでイ。」

義希が言った。

「俺は結構気に入つてんだよね。」

銀時が言った。

「俺もーー。」

龍銀も元気よく言つた。

その後、万事屋銀ひやんはいつも道理の暇な生活に戻った。

銀・・・。

俺アはお前らを護つてやるでさア。

子供だった俺を護るために六鬼神の中には入れなかつた事のよつと
・・・。

俺にしかできないことをやるでさア。

第十四訓 子供の元攘夷志士（後書き）

どうでしたか？

義希は結構なガキだけどやる時はやつります。

かなり・・・。

感想お願いします

第十五訓 襲撃（前書き）

残酷なシーンあり。

ご注意ください。

第十五訓 襲撃

「なんかついてきてるなア・・・。」

義希は呟いた。

銀時からおつかいを頼まれてコンビニでイチゴ牛乳を買つに行つた
義希はとおりに少ない道を歩いていた。
時は夜。

「俺に何か用ですかイ？」

義希は前を向いたまま言つた。

「源 義希殿とお見受けする。」

ついてきてる奴が言つた。

「勘違いでねえーですかイ？」

義希が言つた。

「俺らはお前に人質の交渉にやつてきた。抵抗せずについてこい。」

男は言つた。

「そう言つてついてく奴がいるかイ？おめーらあれだろイ？六鬼神
を狙う奴の下つ端だろイ？」

義希は聞く。

「その通りだ。」

— ならなおさら、ついでにいねえですね。」

義希は振り返り、刀を抜いた。

男は手を振った

それと同時にあんな風にIJNから累ともかせられてた

義希が言つた。

「どうだ？」これで諦めたか？」

男が言つた。

「逆でイ。こんぐらい朝飯前ですゼイーー！」

義希はそう言い、男どもの中に入つて行つた。

「死ねエー！－くそヤローだも。」

義希は刀を振る。

男どもは斬りかかる。

ブショウウウウウウ！！

男から大量に血が飛んだ。

「全部返つて自分でやつてしまふ。」

義希はそのまま刀を振つた。

その他の異常を止める。

義希は左手で短刀をとり、

માનનીય મંત્રી

そして、短刀で刀を止めた男にも突き刺す。

「情けね工」

義希は呟いた。

「なにをしている潰せエー！」

リーダー格の男が言った。
男どもは走り出す。

「死ね！！」

どんどん刺す。
刺しまくる。

15分ほどで立つてしるのは男と義希だけになつた。

義希は刀をしまつた。

「ほり、返り血だけに済ましたぜ！」

義希が頬や着物に血が付いている。

全てやつたやつの血で……。

「さすがといひとこだな……。殺しの情報屋。」

男が呟いた。

「だが残念。」

男がそう呟いた時、横から男が出てきた。

「なつ……」

ブシュウウウウウー！

「ぐあ……」

義希が言つた。

わき腹から血が出ている。

「油断したのが悪かつたな。返り血だけじゃなくなつたぜ。」

男が言つた。

「色々と騙すのがす”いねエー……。」

義希は無理して作った笑顔で言つた。

（ヤベーな。意識が・・・・。）

義希はそのまま倒れた。

「ハア、ハア、ハア、ハア。」

義希は横になつたまま息の音だけがした。

「さすがだな。これで工藤様も喜ぶことだ。」

(工藤様だと。)

義希はそのまま意識を手放した。

「ファン。やつと眞絶したか・・・。」

男はそう言い、義希を抱きしめたその時……。

一人の女と一人の男が来た。

「なんだともーーー。」

男が声を上げた。

その隣でさつき義希を斬った男から血が飛んだ。

「義希が負けるとは珍しいな・・・。」

高杉が言つた。

「そりだよねえ、だつて銀時より強いんだから。」

露呑も言つた。

「おめーら六鬼神の高杉 晋助と芦咲 春櫻か。」

男が呟いた。

「そのとおり。私が芦咲 春櫻。」

「俺アが高杉 晋助。」

高杉と露呑が言つた。

「オメーもやつてやるよ・・・。」

高杉が冷たく言つた。

「失敗だな・・・。」

男はそういう言ひ去つて行つた。

「義希イー！」

露呑が叫んで、義希の方へ走つていいく。
そして、脈に手を当てる。

「ふう・・・。良かつた、脈はある・・・。」

露呑が言つた。

「こいつも無理するな・・・。」

高杉が呟いた。

「男なんてみんなそういうもんだよ・・・。」

露呑が呟いた。

「ククク。そうだな・・・。」

高杉が言った。

「じゃあ、高杉。義希を抱いで万事屋まで行こつか?」

露呑が言った。

「俺が抱ぐのか・・・?」

「うん。だつて男じやん。」

露呑が元気に言った。

「しゃーねえな。」

高杉はそう言い、万事屋へ行つた。

「来客中か?」

高杉は玄関を開けて呟いた。

「「」の下駄……。」

露呑が呴いた。

そこへ、新ハが奥からやつてきた。

「高杉さんに露呑さん。……つて義希さんどつしたんですか？」

新ハが驚きの声を上げた。

「散歩しているときにな義希とバカな男どもを見つけてね。」

露呑が言つた。

「おい、どつしてつて……えつ……」

銀時がやつてきて声を上げた。

「銀時、大丈夫。脈はしつかりしてゐよ。」

露呑が言つた。

「義希もか……。」

銀時が呴いた。

「もかつてどつこつ意味だ……？」

高杉が聞いた。

「もしかして、辰馬にも何かあったのか？」

露呑が聞く。

「辰馬じゅねえーが、陸奥がよ・・・。」

銀時が呟いた。

「あの子も？」

露呑が心配そうに言つた。

「ああ。そんな大きな傷じゅねえーがな。」

銀時が呟いた。

そこへ、桂がやつてきた。
その後ろには・・・。

「晋助様、大丈夫っスか？」

「また子！それに、河上に武市に神威、阿伏兎・・・。」

露呑が言つた。

「オメーらがどうして・・・。」

高杉がそう呟いた。

そして、あることに気付いた。

「お前ら、返り血だらけじゅね？」

銀時が言った。

「そつつス。なんか知らない奴らが襲ってきて、人質になれとか意味分かんねえツス。」

また子が明るく言った。

「全部返り討ちにしたで」
「河上も言った。

「それ・・・わしも、言われたき。」

陸奥が肩を押さえてやってきた。

「陸奥、無理するじゃなか。」

辰馬が心配そうに言った。

「大丈夫じゃき。わしはそんな馬鹿じゃないぜよ。」

陸奥が言った。

「じゃあ、義希もそんなこと言われた可能性大だな。」

銀時が呟いた。

「ともかく傷の手当てをするべきだ。」

桂がそう言い、高杉たちも中に入った。

「むつち、大丈夫アルカ？」

神楽が聞く。

「みんな心配性じやな。」

陸奥が明るく言った。
肩には包帯が巻いてあつた。

「こいつは何で怪我したんだ？」

高杉が言った。

「刀で肩斬られただけじやき。」

陸奥が言った。

「ま、辰馬のおかげで助けられたんじやがな。」

陸奥が付け足すように言った。

「で、ジラ。義希は大丈夫か？」

銀時が聞く。

「ああ。大体の血が返り血だし、大きな傷はわき腹だけだからな。」

桂が言った。

「良かつた。」

そのまま、銀時たちは寝た。

次の日。

「イリは・・・。」

義希は眼を開けた。

「痛つ・・・。」

わき腹に激痛がはしつた。

「起きたか?」

桂が言った。

「ジラ・・・。」

義希が言った。

「礼は高杉に言え。イリआ前を連れて來たのは高杉だからな。」

桂が言った。

「イリは・・・銀時のど?」

「あ。」

少しの沈黙が続いた。

「動き出したな・・・。」

桂が呟いた。

「ああ・・・。」

義希が短く返事をする。

「おお、起きてたのか？」

銀時が起きてきた。

その後、大体の人が起き始めていた。

そして、9時「ひろ・・・・。

ピンポーン。

「はーい。」

いつも道理、新八が出た。

「よう、眼鏡。」

「土方さん、沖田さん、それに近藤さんまで。どうしたんですか？」

新八が聞く。

「そこらの路地で50人ほどが斬り殺されててな。お前らしらねえ

一か?「

土方が聞く。

「えつと、僕は知り『それやつたの俺ですゼイ。』ってえつ?」

新八の声を義希が遮る。

「はつ? てかお前、誰ですかイ?」

沖田が聞く。

「俺は源 義希。歳は19ですゼイ。」

義希は明るく言った。

「で、幕府の狗、立ち話やめたほつがよくね?」

龍銀が言った。

そして、真選組は中に入つてびっくり。

「なんか、色々いねえーか? . . .?」

土方が呟いた。

「それはな、昨日あひらひらひらで襲撃されてな。ま、その犠牲が義希と陸奥に鬼兵隊のこいつらつてことかな?」

銀時が言った。

「で、なんで俺アがやられるわけですかイ。大体あのクズ。一人隠してたとかありえねエー。あの一人が居なかつたら全部返り血で済ましたんディ。」

義希がブツブツと言つている。

「お前は銀時よりも強いからな・・・。」

桂が呟いた。

「おい・・・桂ア・・・今何て言つたんですかイ？曰那より強い？」「いっが？」

沖田が驚いた声で聞く。

「そんなことねエですゼイ。銀より強いわけありませんディ。」

義希が言つた。

「そんなことねエーよ、お前50人を一人でしかも全部返り血で殺すなんてお前にしかできねエーことだよ。」

銀時が言つた。

「そりかイ・銀もやるわと思えればできるんじやねエーですかイ？」

「できたら天才だろ・・・。」

銀時が呟く。

「そりだ、幕府の狗。新たな情報をもらつたぜ。」

高杉が言った。

「なんだと！」

土方が言った。

「あいつらが特に狙つてるのが日華の隊長。」

桂が言った。

「日華？」

沖田が聞く。

「日華は銀時が率いていたんだよ。隊員には龍銀に義希が居たね。」

露呑が笑顔で言った。

「つまりはあいつらが狙つてるのって……万事屋か？」

近藤が聞く。

「そのとつりだ。」

桂が答える。

「ひとつ聞いていいですかイ。義希って攘夷戦争に参加していたんですかイ？」

沖田が聞く。

「ナリですゼイ。9歳で参加してたんですか。」

義希が笑顔で言った。

「9歳イ！？」

真選組が驚きの声を上げる。

「そんなに驚くことですかイ？」

義希が聞いた。

「ふつうはそうだろ・・・。」

「てかなんでそんなガキが攘夷戦争に参加なんかしてたんですかイ？」

沖田が聞く。

「それは・・・。」

義希が口にくる。

「まあ、いいですゼイ。」

沖田が言った。

「じゃあ、今回の「ひとまつまごくわいふせ」とへ。お詫びの紙をつた

るよ。」

土方はそう言い、去つて行つた。

「お前うじうすんの？俺んとこに居すわんのか？」

銀時が聞く。

「お前が困らなければそのつもりだ。」

「俺もだ。」

桂と高杉が言つた。

「仕方ねえー。あんま大きなことすんじやねえーぞ。特に神威！」

銀時はそう言い、神威に念を押す。

「お兄さんひどいなー。」

神威が声を漏らす。

「特に神楽と喧嘩しないよつこーー！」

銀時は更に念を押し、また寝転がつた。

「銀は本当によく寝るなー・・・。」

義希が呆れた声を出す。

「それが、銀時の凄いとこだよ。」

露呑も笑いながら言った。

第十五訓 襲撃（後書き）

どうでしたか？

銀魂の新OPとEDめっちゃかっこいい。

特にOPの神威と高杉が。

神威がかわいい。

そして、真選組もめつちやかつこいいー！

あれは最高です。

感想お願いします

第十六訓 いたずら書き

「暇だア～！～！」

義希が言った。

万事屋銀ちゃんに居るのは高杉、露呑、神威、阿伏兎、鬼兵隊の人たちに、義希、それに辰馬と陸奥。

「お前は安静にしてる。」

高杉が言った。

「なんでイ。もう怪我治つたってイ。痛つ！」

義希が言った。

「ど二が治つたの？」

露呑が呟いた。

「男つて安静つて言葉知らないんだから仕方ないッス、姉様。」

また子が言った。

「男はバカじやきにのー。」

陸奥も言った。

「はいはい分かりましたよ。俺アバカですゼイ。」

義希が頬を膨らませて言った。

「アハハハハハ。男はバカの方がいいぜよ。」

辰馬が言った。

義希は一コツと笑顔になった。

「ま、陸奥も義希も怪我を治すのが先じゃがな。」

辰馬が付け足すよつに言った。

「分かったきに。」

陸奥が素直に言った。

「はいはい。分かりましたよオ。」

義希も頬を膨らませているがちゃんと返事をした。

「でも、暇すきじやねえーですかイ？」

義希が呟いた。

「ああ。それは分かる・・・。」

高杉も呟いた。

「仕方ないぜよ。留守番じやきにの一。」

辰馬が言った。

「俺どっかに行きたい。江戸なんか来んの久しぶりなんだよ。」

神威が呟いた。

「グーグー。」

「つーか、阿伏兎はまだ寝てんのか？」

高杉が聞く。

「だね。」

露呑が答えた。

「大人のくせにして情けねえーですぜイ。」

義希が呆れたように呟いた。

「あ、そうだ。暇つぶしに。」

神威がニコツと笑つて言った。

そして、机の上から筆を取り出した。

「いたずら書きをしよ。」

神威は筆で阿伏兎の顔に何かを書いた。

「アハハハハハハハツ。」

義希が腹を抱えて笑つた。

阿伏兎の頬にぐるぐるが書いてある。

「似合ひついでござる……。」

河上が呟いた。

「以外ですね……。」

武市も呟いた。

「もつとやひづれ。」

義希は阿伏兎の眼にまつ毛を書いた。

「ブツ、ハハハハハハ。」

神威も腹を抱えて笑つた。

「わしも書くぜよ。」

辰馬も阿伏兎の顔に色々書いた。

「アハハハハハハ。」

神威と義希が腹を抱えている。

そこで、阿伏兎が起きた。

「ゲツ・・・。」

「お前ら何やつてんの?」

阿伏兎は神威と辰馬、義希の持つている筆を見て言った。

「いや、これにはわけといつものが・・・。」

それからといつもの・・・。

万事屋銀ちゃんでは、じばいぐの間騒がしかつたとさ。

第十六訓 いたずら書き（後書き）

どうでしたか？

しょもねえ一話になりました・・・。

感想お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9807z/>

鬼の女～血の娘～

2012年1月13日18時52分発行